

＝ 「やる気・その気」が明日^{あした}への架け橋 ＝

12月 は私の誕生月である。毎年、暮れには1年が経つのは早いな〜と、思われる方も多からうが、年末に生まれた私にとっては、年を重ねる度に月日の過ぎ去る想いは、その比ではない。…なにを年寄りじみたことを言っているんだと、どこからか叱咤が飛んできそうであるが。

そんな折に気合いを入れ直す良い機会に出会った。

12月2日(土)、基幹労連兵庫県本部が主催する労働学校に呼ばれた。この取り組みは、県本部構成組織の執行委員をはじめ若手役員を対象に、1年間で計7回にわたる研修の場を開設し、次代を担う活動家づくりを行うというもの。数えて7期目という。この労働学校からは、現役の県本部事務局長をはじめ、各組合のリーダーを多く輩出している。

今回の講演は90分間、産業別労組・基幹労連の生い立ちと課題、そして受講生の皆さんに期待すること、というテーマをいただいた。私にとっては講演というよりも自らもその仲間に加わり檄を飛ばすというものであるが…。

その講演の最後に語った話を一つ。何事も自らが“その気”にならなければ事は進まない。その概略を以下に。

単組の書記長時代の話である。『それは、組織教宣部長(執行委員)が組合祭りの企画書を作成していたときの話。彼の真面目さ故はわかっていたが、その姿は、頭を抱え、苦虫をかみつぶしたような顔で一向に前に進まない様子。組合祭りは、組合員をはじめ、家族も、地域の方々もお呼びする2年に一度の最大イベントである。それを企画する者が、自らが熱い思いをもって、ワクワクし、楽しむイメージを持ってないのでは参加いただく皆さんに喜んでもらえるはずがない、むしろ迷惑だ。これまで契約・準備等にかかった費用は組合長に頭を下げるから止めてしまえ。と怒鳴り散らして帰宅した。その夜の遅くに、当該の執行委員が目には涙を浮かべながら我が家の玄関に。書記長の言わんとすることが良く分かりました、何とか祭りをやらせてほしいと。きついことを言い過ぎたかも…と思っていた時だけに、こちら胸に迫るものがあった…。まあ飲むか、ハイ！ 手分けして皆でやるか！…ハイ！！』関わった実行委員達も大いに盛り上げ、わが労組最大イベントであった組合夏祭りは大成功。『その執行委員が、今、私の後任の組合長である。』というもの。

今回の受講者は、委員長、書記長に尻を叩かれての参加が最初の一步だったかもしれないが、休日返上・仕事の合間を縫っての参加は、自らがその気になったからに違いない。彼女らは、約50名の仲間と、これから1年共に学ぶ中で、自分の得意・不得意を知り、足らざるを補い合うことの大切さを学び、労働運動のあるべき姿を模索していこう。

そして、その経験は職場でも生きてくるはずである。私自身、若き受講者の熱い思いと何かを学んで持ち帰ろうとする姿勢に大いに感動させられた一日であった。

冒頭に触れた年寄りじみた話は恥ずかしい限り。12月27日、また一つ年を取るが、それは多くの仲間を今年もつくることができたと振り返る日にしていきたい。やる気・その気が明日をつくる。若い者に負けちゃれん！

来年の干支は戌。自らの努力と仲間の支え合いで“ワン・ダフル”な一年にしていこう。

そのためにも、先ず安全。年末・年始、世界の各地で、三交替勤務で昼夜業務に励む仲間がいることを胸に刻みながら、皆様のご多幸を願って今年を締めくりたい。ご安全に。

2017年12月14日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一